

## 形式的告示について——初期ハイデガーの方法論

寺 邑 昭 信

— 1 —

1976年のハイデガー全集刊行開始以来、早くも20年以上の年月が経過した。ハイデガーの生前、一般には閲覧しがたいものであった初期フライブルク講義は、現時点では第62巻をのぞき、当時の学生の筆記ノートによるものが中心とはいえ、全集版で我々が手にしうるものとなっている。

1919年の戦争短縮学期講義『哲学の理念と世界観問題』に始まり、マールブルク転出前の1923年の『存在論（事実態の解釈学）』に至る初期フライブルクでの講義は、ハイデガーが教授資格論文までの純粹論理学者としての立場を乗りこえあるいは徹底化し、（あるいはカトリック（普遍）からプロテスタント（個）の立場へと移行し）すでにその教授資格論文の結語で「生ける精神」として登場した歴史的具体的な人間の存在、事実的な生の範疇構造を、ディルタイ等の影響のもと、宗教的な生、とりわけ原始キリスト教的な生に重点をおきながら根源的に捉えようとして格闘する様を、また「十字架の神学」(ルター) に対する「恩寵の神学」の背後にあるアリストテレスの存在論との対決および摂取を如実に伝えるものとして、ヤスパースの『世界観の心理学』への論評やいわゆる「ナトルプ報告」(1923年) も含め『存在と時間』の理解を深めるために不可欠の資料群をなしている。

この時期のハイデガーの思索は、『存在論』の序言の言葉、「探求における同伴者は若きルターであり、手本はルターが嫌ったアリストテレスだった。刺戟を与えたのはキルケゴールであり、見る眼を与えたのはフッサールである。」(GA63/5) が示唆するように、異なった伝統が混じりあって、新たな形態を生み

だそうとする流動性を帯びたものといえるが、とにかくこの時期のハイデガーにとって、哲学とは、もはや既存の学派の哲学でも世界観哲学でもなく、理論化される以前の事実的な生の直接的体験に迫り解明し、ひいては自分自身の在り方に転換をもたらす学、根源学なのである。またこの根源学が解明しようとする事実的な生は、歴史的な動きを持って自己を展開して行く動的な存在であり、物を扱うような仕方や、意識体験を記述しようとする仕方、あるいは帰納法的な分類という仕方では覆われてしまうのである。ハイデガーはすでに教授資格論文の結語で、理論的態度を相対視していたが（GA1/406）、この時期には理論的態度に対する理論以前の在り方の優位を明確化し、とりわけ各種の理論的態度は、生から離れた客観へと態度をとる *einstellen* ことにより、認識対象への生き生きした関係を中止してしまい *einstellen*（GA60/48参照）、生をその根源から理解するよりも脱-生化 *Ent-Lebung*（GA58/75f.）してしまうと主張している。そこで根源学としての哲学がその固有の対象である事実的な生、あるいは自身の真の姿をどうやって的確に捉えうるのか、という方法の問題が、この時期のハイデガーの重要な関心事であり続けることとなるのである。

またこの根源学の解釈の遂行を方法的に担うのが、「前理論的な根源学」の別名でもあるハイデガー流の現象学であり、この現象学は、あるいは理論的態度による生の経験の歪曲の回避に専心し、あるいは理論化によって隠蔽された生の本来の姿を明らかにするために解体を行うことにより、事実的な生に迫ろうとするのである。コヴァックの言葉を借りるなら「根源学としての哲学は「内容」つまり生と世界についての観念の体系ではなく、生きられた理解に与えられるものの「生の流れ」を開示し暴露し出会うための「方法」」（RH99）なのである。

さてそうした事実的な生への哲学的アプローチを目指す中、この時期には、世界内存在、有意義性、本来性と非本来性の二分法、時熟、カイロスのおよび通俗的な時間など後に『存在と時間』において中心的となる実存範疇の多く、主観-客観以前の非人称的事態を表す「世界がある」*Es weltet* といった表現、生起 *Ereignis* 等の概念、気遣いへと発展的に姿を変えて行く心労 *Bekümmerng*,

あるいは頽落の原型のルイナンツといった表現、さらには現象学的解体の構想（ファン・ブーレンは、ハイデガーの現象学的解体の解体概念が、当時彼が取り組んでいたルターの *destructio* に遡ることを指摘している（RH167f.））等が、しかもその早い時期に登場していることが注目される。と同時にまた、この時期に頻繁に使用されているものの、『存在と時間』ではほとんど姿を消してしまう概念も目につくのである。その中でも、特に気になるのは、特定の実存構造を示す言葉ではなく、当時のハイデガーが事理的生の解釈の着手の方法として用いている「形式的告示」*formale Anzeige* という表現である。この言葉は、『存在と時間』にはこの形では一カ所登場するだけであり、また筆者の学生時代には主題的に取り上げられることのなかったものである。

この表現に関しては古くはレーヴィットが『ハイデガー 乏しき時代の思索者』において、1923年の講義『存在論（事実態の解釈学）』に関連して触れているが、ごく簡単なものである。（L/73）60年代に初期フライブルク講義のノートを目にし得たペゲラーは『マルティン・ハイデガーの思索の道』（1963年）の中で、形式的告示がまとまって扱われている1920/21年冬学期の『宗教の現象学入門』を取り上げているが（P1/36f.）、そこではカイロスの時間概念の問題が重点的に取り扱われており、形式的告示については（第二版の後書きでは言及されるとはいえ第一版では）全く触れられていないのである。また、茅野教授の浩瀚な研究書『初期ハイデガーの哲学形成』（1972年）には、上述の『存在論（事実態の解釈学）』についてのベッカーの報告（『数学的存在』1927年）が紹介されており（318頁以下）、その中には、「（ハイデガーのいう）「形式的—指示的（*formal-anzeigend*）な概念」についての言及が見られる。しかし、この概念の詳細な検討はされていない。

筆者が「形式的告示」という言葉を頻繁に目にしたのは1985年刊行の全集61巻においてであり（拙稿『哲学と事理的生』参照）、この概念についての本格的な言及が目立つようになるのは、この言葉が登場する初期フライブルク講義の刊行され始める80年代後半になってからと思われる。例えばガダマーは『マルティン・ハイデガーの一つの道』の中で「我々のすべてが、ハイデガーが彼の

初期の著作で「形式的告示」と述べたとき、彼はすでに彼の思索の全体に対して効力を持ち続ける何かを定式化したことを学び直すべきなのである。ここで問題なのは彼の思考の企ての全体にとって決定的なものである。」(RH33)とハイデガー哲学にとってのその重要性を指摘している。またペゲラーは『ハイデガーの論理学研究』の中で、初期のハイデガーが生との連関、体験の絶対的な中断や脱生化あるいは理論的な固定化に対抗して生の事実態に関わって行く方法として「形式的に告示する解釈学」(P2/82)を構想したことを述べ、その展開のあとを辿っている。さらにキシールは『クリスチャンへの途上のハイデガー1920-21』において「哲学への永遠の入門としての自己理解への集中的な現象学的練習の主要な術語は「形式的告示」ということになるのであり、それはハイデガーが1919年の戦争短縮学期に彼の一生にわたるトピックへの突破を行って以来、彼の解釈学的方法のまさに核であり続けたものである。」(RH177)と述べている。

これらの指摘から我々は、「形式的告示」は、当時のハイデガーにとり、彼の哲学の中心的方法概念なのであり、またそれは初期フライブルク時代に形を取り始めたものであったことを知るができる。とはいえ、初期フライブルク講義では、なるほどこの「形式的告示」という言葉は(とりわけ第61巻で)頻繁に用いられているものの、講義は事実的な生の動的構造の具体的解釈を狙いとして展開されているためか、その方法としての「形式的告示」自体についての主題的な説明は、第60巻所収の『宗教の現象学入門』の前半部分をのぞけば、見られないのである。そこで本稿は、初期フライブルクでの講義に散見する「形式的告示」についての発言を手がかりとしながら、「形式的告示」がどのような方法なのか、その一端を明らかにすることを試みようと思う。

「形式的告示」という表現は、初期フライブルク講義の随所に見られるが、フェヘル (RH83) の指摘も参考に、筆者が目にした範囲で主な箇所を挙げる

と以下のようになる。全集58巻『現象学の根本問題』248頁，第59巻『直観と表現の現象学』29頁，62頁，74頁，78頁，85頁，第60巻『宗教的生の現象学』55頁，62-64頁，第61巻『アリストテレスの現象学的解釈』19頁以下，32頁-34頁，60頁，66頁以下，113頁，116頁，134頁，141頁，171頁，174頁，175頁，183頁，第63巻『存在論』79，80頁，（また全集9巻『道標』所収『K.ヤスパースの「世界観の心理学」の批評』9頁以下，32頁，38頁以下など）。

そこで，まずこれらの箇所からいくつかを引用することにしよう。勿論コンテキストから切り離されたこうした引用の仕方は，意味連関を重視するハイデガーの理解にとって相応しくないものかも知れないが，「形式的告示」のおおよその輪郭を明らかにするためにあえてこうしたやり方を取ることにする。また，まとまった説明の見られる第60巻の該当箇所については，後で別に考察することとする。（太字は原文での強調であり，また下線強調，省略は筆者による。）

A-1「この探求にとって現存在（その都度の自分の現存在）がその中にある先持は，形式的な告示において，定義される：現存在（事実的な生）とは，世界の中に存在することである。」 GA63/80

2「問題とされている本来的に対象的なものは，形式的な告示では，実存として確定されよう。そのように形式的に告示された意義において，この概念は「私は存在する」という現象を，そして原理的な現象連関とこの連関に属する問題性の着手としての「私はある」の中に存する存在意味を指し示すべきである。」 GA9/10

3「形式的告示において…一つの…問題着手を準備するために，こう言うことができる：「実存」とは，何かについての規定性である。…そのように理解された自己の存在は，形式的に告示するならば，実存を意味する。」 GA9/29

4.「形式的に告示するなら」：ひとは非本来的な所有の中で生きている。」 GA61/34

5.「配慮への配慮的なまなざしにおいて，しかもそれを全き動性において受け取るならば，ルイナンツに関して四つの形式的に - 告示する性格が確定される：  
1. 誘惑的なもの (Tentative)，2. 安心させるもの (Quietive)，3. 疎外させるも

の (Alienative), 4. 無化するもの (Negative; aktiv, transitiv)。」 GA61/140  
 B-1「先把握の問題性はみな「方法」のそれである。…それゆえ方法の意味をひとは先把握そのものとともに先与させられているのでなければならないのであり、方法は先把握とともに同じ意味源泉から発出するのである。「方法」の意味確定は、形式的に告示する意義(例えば「道」)の中で、本来的で具体的な諸規定のために未決に保たれねばならない。」 GA9/9

2「(客観化)の批判的破壊という我々の仕事においては、それらの概念は(生、体験、私は、私を、自己…筆者注)、一義的に確定されていないのであり、むしろただ一定の諸現象を指示しているだけであり、ある具体的な領域へと示し入れるのである。だからそれらは単に形式的な性格を持つだけである。(「形式的告示」の意味)。これらの概念の形式的-存在論的骨組みの探求は重要である;しかし形式的なものは事物については何も先決しないのである。…形式的概念はもっぱら告示的なのであり、それらはまだ表現の概念の機能をもたない。」

GA58/248f.

3「この考察は範疇的に具体的に、しかし絶えず形式的に告示的に—…独自の「一時的という」性格を有する。」 GA61/116

4「これらの性格は形式的に-告示的である、すなわち、それらはその都度の経験と解釈の方向からその具体的で事実的な範疇的規定性を獲得するのである;つまり同時にそれらの性格によっては、事実的な生の具体的な諸動性に関しては、何も「述べられて」いないのであり、むしろそれらは眼差しの方向を与えるだけである、生の存在意味の範疇的な解釈が先取の中にあるかぎりである。」

GA61/141

5「私は内容に向きを「転じないこと」。その定義は「形式的に」告示しているのであり、「着手」における道なのである。内容的には未規定であるが、遂行的に規定された拘束が先与されているのである。

現象学的な定義はそのような特殊実存的な時熟なのである;この時熟においては決定的な意味で理解の遂行があるのである。」 GA61/20

6「形式的に告示されている」とは、対象自身をどこかで何らかの仕方で手に

入れることが自由であるかのように、何らかの仕方であら表象されているとか思念されているとか、暗示されているとかということではなく、述べられているものが「形式的なもの」の性格をもつというように告示されていることである、それは非本来的であるがまさにこの「非」の中には同時にポジティブに教示があるのである。その意味構造の点で空虚に内容的なものは、同時に遂行方向を与えるものでもある。

形式的告示の中には、全く特定の拘束が含まれている；その拘束において述べられるのは、本来的なものに達するべきであるならば、非本来的に告示されているものを味わいつくし充実し、告示に従うという道だけがあるという全く特定の着手方向の内に私が立っているということである。…そのように形式的なものとしての空虚なものの理解がラディカルになればなるほど、ますますそれは豊かになる、なぜならそれは具体的なものに通じるというようにあるからである。

それゆえ告示は誤った仕方では改善されてはならない！告示と指示の性格に対して、「形式的」という規定は決定的なものを意味する！対象を「空虚」に意味する：しかもそれでも決定的である！恣意的にでもないし、着手を持たずでもない、むしろまさに「空虚に」そして方向を規定しつつ、告示しつつ拘束しつつなのである。…形式的なものの実存的意味。その反対は「実質的」、質料的に偶然的ということではない。形式的なのはまたただちに形相的とも違う；類的に普遍的なものという解釈で形式的を使用することはそもそも現象学においては問題である。「形式的」は、告示されたものの根源的な充実の時熟の遂行の「着手性格」を与えるのである。」

GA61/33

7「形式的告示は、哲学の内部では不可欠の意義をもっている、この意義は理解できるものとされうるが、ただしそれは形式的告示とそれによって告示されたものが、実体化されたり哲学的な考察の目標と対象にされるのではなく、確固として規定された仕方で哲学の課題に奉仕している場合にだけなのである：つまり注意を促す根源理解の課題にである、つまり同時に具体的なものや事実的なものから真に動機づけられており、事実的なものに共通のものとしてではな

く、むしろ事実的なものに、先決せずに、また決定的に達成したり先示したりせずに触れることである。 GA59/85

8 「私の生」という対象のこの未規定性は方法的に何ら欠陥なのではなく、むしろそれはまさに事実的な生の時熟の進展における自由で常に新しい接近可能性を保証する；それはその対象を消し去るのではなく、対象に、真正に出会う可能性を保証し指示するが、しかし予め規定しはしないような未規定性である。 GA61/175

9 「形式的に告示しながら事実態の動性を追究すること、それぞれ事実態の諸構造をこじ開けつつ、決定的な根本状況に向かいながら。それとともに哲学することの動性意味、つまり現象学的な解釈が仕上げられる。…それに続いて形式的に - 告示する、方法的に解釈的な逆の運動が、事実的な出発点まで戻る、しかも今や方法的なものが、つまり表現的に遂行的なものが、真正のものとして我がものとなるようにである。 GA61/183

10 「形式的な告示の空虚な理解可能性が具体的な直観源泉への眼差しから充実されるように、先持にもっと親しみ、それを我がものとしなければならない。 GA63/80

C-1 「形式的告示ということによって（この中にはあらゆる哲学的概念と概念連関の方法的な、ここでは詳しく説明されない根本意味が見て取られなければならないが）まさに例えばキルケゴールやニーチェの特定の実存理解への頹落が予防されるべきなのであり、それは実存現象の真正の意味を追究し、その追究を解明するという可能性を獲得するためになのである。 GA9/10f.

2 「哲学における概念と定義の役割；定義の形式的意味を参照、加えて哲学的な（完全な）定義：実存的に形式的に - 告示する原理的な定義。告示しつつ：遂行一般に対して誘惑されたそして自然に見える理論的構え的な落下からの突き離しを与える；「予防措置」がなされる！定義は、そうした内容へのこの傾向をまさに遠ざけるようにあり、または、哲学の定義は告示的な定義だといわれる場合、その中には内容の理解のための全く特定の課題が含まれているのである；未規定であるが、しかしその道の如何にが。 GA61/32



3「a」形式的告示の予防的機能…この形式的な告示（…）は、それ自身のうちに、指示的な性格とともに同時に予防的な（防ぎ、禁ずるという）性格をもつ。この性格は現象学的な解釈の遂行段階のすべてにおいてその着手の方法の基本意味なのであり、いつでも「同時に」多面的で指導的で防御的な性能のものである。…

形式的に告示するものの禁止的な性格の指摘は、この箇所では、まさに先に述べたルイナツの諸性格が、たやすくある存在者の確固とした根本特徴として受け取られうるかもしれないこと、それゆえ生の現存在の根本規定と詐称されやすく—たとえばベルクソンやシェーラーの意味での一生の存在論的形而上学を復興しようとするかもしれないという点に動機づけられている。」

GA61/141

以上、やや長すぎたが、初期フライブルク講義での「形式的告示」についての発言のいくつかを三つのグループに分けて引用した。最初のグループは、ハイデガーが根源学の対象である事理的生に関する規定を形式的告示的に述べている具体例である。ここでは例えば、世界内存在、実存、あるいはルイナツといった方向性をもった表現が、解釈の対象である現存在の在り方の先把握に基づいてまずもってその全体を名指す形式的告示的定義であることが分かる。『存在と時間』では、形式的告示に類した表現はほとんど登場しないとはいえ、そこで現存在の動きを表すべく採用されている様々な規定も、先把握に基づく解釈の出発点を示す形式的告示の方法による定義と考えてよいであろう。

次に第二グループであるが、ここではそうした形式的告示の「形式的」ということの意味説明を中心にして、形式的告示自体が事理的生に迫るための方法、とりわけ着手の方法であること、そしてこの方法は、告示されたものを具体的に規定された姿で示すのではなく、あくまでその内容に関しては未決の状態に保ったまま空虚に示すこと、しかもそれは以後の具体的充実、解釈の遂行ための方向を拘束的に示すものであることが述べられている。

哲学の方法について、既にハイデガーは教授資格論文の序論の中で、まだ論

理主義の見地から「経験的－発生論的説明」(GA1/201)は拒んでいるとはいえ、方法は思想の叙述や伝達の明確に限定された形式ではなく、「問題を我がものとする仕方とその必然性」(GA1/198)あるいは「一定の範囲の問題をはじめて可能にするところの基礎についての知、この基礎をめざすこと」(GA1/200)であると述べていた。初期フライブルク時代の講義では、根源学としての哲学の本来の対象が、教授資格論文の時期の「妥当する不変の意味としての範疇」から、生き生きとした事実的な生の範疇に取って代わったわけであるが、この事実的生は、理論的概念化もしくは客観化では、流れを停止され(GA9/18, GA58/78ff. 参照)、脱－生化され(GA56-57/17節, GA58/77参照)物象化され(GA58/127, 187)空間化されて形態を歪曲されてしまい(GA59/26f.)、あるいは生の特殊性は言葉によって一般化され、一般性に解消されてしまうか、あるいは今ここ性 *haecceitas* を特色とするがゆえに言葉では捉えがたいもの(「個体は語り得ない」GA9/39f.)非合理的なもの(GA59/24f.)と見なされていたものである。また様々なアスペクトを有する生には常に有り余る豊かさ、過剰(ジンメル)がある以上、また相対主義の問題がつきまとう以上、それを学的に捉えうるかも問題である。それゆえ初期フライブルク時代のハイデガーは、生を生として根源的にしかも学的に厳密に(根源学、現象学独自の厳密さに関してはGA9/9, GA56-57/110, GA58/137f. GA60/9f. 等参照)把握するための方法の問題と格闘し続けていたわけである。(例えばGA58/135以下の「哲学—方法をめぐる格闘」という表題参照、また59巻の副題は「哲学的概念形成の理論」である。)この時期のハイデガーは、哲学が科学ではないこと、そして方法はどんな対象にでも応用できるような技術なのではなく、むしろその対象がそれに相応しい方法を要求することを再三強調するのである。(GA9/9f. GA60/3f. 等参照。)

結局ハイデガーは、(フッサールの範疇的直観の考えを、存在者ならぬ存在の直観の可能性と捉え)「理解する直観、解釈学的直観」(GA56-57/117)を自分自身がそうであるそうした生をその根源に遡って我がものとするための方法、あるいはその遂行の仕方と位置づけるのであるが、まさにその解釈のための着手の仕方が、内容を確定した客観として呈示するのではなく、先理解に基づいて(「問

題の着手の中には既に心的なものに対する一定の仕方で分節している先把握が予め与えられて働いているのである。」(GA9/8) 動きをもった生の諸現象に対して方向性を持った呼び名、ないし課題を与え、あとは具体的な解釈の遂行に委ねるという「形式的告示」の方法なわけである。ここには、体験の理解、解釈というデルタイの手法に、フッサールの意味志向、意味充実という志向性のダイナミズムが取り入れられ、(しかも現象学的破壊というラディカルな方法も組み込まれて)それが事実態の解釈にふさわしい方法に練り上げられて行く様子を見ることができらるだろう。

次に第三の引用グループであるが、ここでは形式的告示のもう一つの働きとしての「予防的機能」あるいは「禁止的性格」が語られている。それは確定した内容を示さないことによって「特定の実存理解への頹落」、「自然的で理論的構造的な態度への落下」、「何らかの哲学的立場から借用された理論的に概念的な先意見や規定」を予防するというのである。ハイデガーによれば、事実的な生の解釈は常に、誤った解釈、不適切な表現手段によりねじ曲げられる危険を有しており(GA9/6参照)、そうした解釈の歪曲、固定化をさけるためにも、事実的な生の在り方の告示は形式的でなければならないというのである。それは告示の真の充実は、既成の理解枠の援用によってではなく、実際に告示されたものが生きられること、各人がそれを我がものとすることによってのみ可能ということでもある。

以上のような簡単な考察から、形式的告示は、事実的な生を表現し概念化するための新たな言語を創出しようとするハイデガーの努力の中から形づくられた方法であること、それは事実的な生の在り方の具体的内容を意図的に直接呈示はしないが、先把握に基づく一定の方向性をもった規定であり、着手点として具体的な解釈の遂行を拘束する方法的に重要な役割を果たしていることが明らかになる。またこの方法自体確定したものとは考えられておらず、まさに哲学的実存の遂行の中で絶えず更新されうるものなのであり、その固定化を防止されなければならないものなのである。(根源への「遡行において現象学はそれ自身いつでも繰り返し現象学的吟味とあらたな基礎づけに服すのである。」

(GA58/11))

なお、すでにレーヴィット (L/73) やペゲラー (P2/84) が指摘していたことであるが、ファン・ブーレンは、この形式的告示とキルケゴールの「間接的伝達」との類似性について詳述している。キルケゴールは客観的真理と主観的真理とを区別したが、それに対応する伝達の仕方が直接的と間接的の伝達方法である。客観的真理は普遍的な真理であるから、客観化する科学的論述、教義、百科事典的体系等の直接的伝達によって読者に伝えられるが、主観的真理は秘密であり直接表現できないために、非客観化的な間接的伝達の中で、指し示したり、注意を促すことによるのみ伝えられるのである。「間接的伝達の指示は読者たちを、彼ら自身の歴史的状況において見出さなければならない主観的真理に導くものと思われている。ここには、向けさせないという消極的な防御機能と指し示すという積極的な指示的契機の両方があるのである。伝達することは、第一に「取り去る方法」であり、それは「口の中が食べ物で一杯のために、食べることを妨げられる」ときに似かよっている。伝達における嘔吐的な契機は著者の意図と伝達の直接的内容への信頼を予防することにある。…(省略は筆者) 伝達の内容は「確定した教義」であってはならないし、理解を容易にするような「何かポジティブなもの」であってもしならない。むしろそれは個人を自分自身の実存における真理の発見と遂行の「困難さ」へと投げ返さなければならないのである。」(VB/327f.) 周知のようにハイデガー自身、キルケゴールの「間接的伝達」の方法への言及がなされているヤスパースの『世界観の心理学』への批評の中で、「哲学もしくは神学においては…(省略は筆者) まさにキルケゴールによってなされたような厳密な方法的意識の高さが達成されたことはあまりないことが指摘されねばならない。」(GA9/41) と述べている。無論、キルケゴールが目指すのは真の宗教的実存なのに対し、ハイデガーのそれは俗世間における事実的生の存在論的把握であり、また偽名、警句、逸話、アポリア、皮肉等を駆使したキルケゴールの間接的伝達方法に対して、ハイデガーの場合は現象学的解釈という方法が取られるというように、内容的には大きな相違があるとはいえ、原始キリスト教の共同体の中に、生の諸傾向方向のラディカルな

転換、つまり「世界の否定と禁欲」(GA58/61)、あるいは本来性の原型を見たハイデガーが、既成の哲学概念では捉えがたいそして日常性を超える事実的な生の根源の理論以前の把握を目指した際、このキルケゴールの方法意識が念頭にあったことは大いにありうることであろう。

またファン・ブーレンは、20年代初めにハイデガーの演習に参加したG・シュテルンがフッサールに提出した博士論文に依拠しつつ、ハイデガーの告示 *Anzeige* という用語がフッサールの『論理学研究』の第一研究『表現と意味』の記号論に由来するとし、次のように述べている；フッサールは、第一研究の第三章で、科学の「客観的表現」と日常生活の「本質的に主観的かつ偶因的 *okkasionel* な表現」を区別している。前者は非告示的であり、話者や発話の環境を顧慮しなくても理解できる。その意味内容は状況に依存せず、異なった志向作用を通して同一であり、完全に現前している。それに対して「私」や「ここ」など人称代名詞や主観に結びついた空間時間表現のような主観的な偶因的表現は、告示的であり、その都度の話し手と状況に応じてその都度意味を方向づけなければならない。この客観化できない意味内容は、主体の状況に結びついており、話者や記録者に依りて変動し、直観に完全に現前することはないのである。

この偶因的な表現の告示的な意味は、「普遍的に有効な指標」(空虚な告示の意味)と「単数的な現前化」(充実化する告示の意味)という二つの志向的契機によって特色づけられる。つまり偶因的表現における「普遍的に告示的な機能」は具体的内容をもたず、間接的に方向を示すのであり、その方向の中で具体的な充実が、単数的な現前化において獲得されなければならないのである。「1924年のシュテルンの博士論文で彼が与えているハイデガー的な解釈によれば、偶因的な表現は、空虚な範疇的一意味志向(告示する意味)と充実する範疇的直観(告示された意味)の間の相互作用であり、それは私に対しての「ここに今ある」の指標的範疇の中で、つまり「状況の範疇」、今ここ性、時間的特殊性(その都度性)の中で「存在一意味」を志向するのである。」(VB/330)ここからファン・ブーレンは、1919年のハイデガーの用いる非人称的表現、*es gibt, es weltet,*

es ereignet は、「まさに「状況」の指標的・時間的範疇で働く、偶因的な表現」であること、「何か」「それ」「ここに在ること」「私のもの」「事実態」「その都度性」についてのハイデガーの叙述は、客観的な表現からではなくむしろその告示的機能が単に未充実の宙ぶり状態におかれたままの偶因的な表現からなる」(VB/330) ことを、またあわせて日常的な用語としての Anzeige が、広告の意味と並んで新聞等での結婚などの出来事の「知らせ」「案内」を意味することから割切な用語選択であることも指摘している。(なお動詞の anzeigen は何かを知らせる、示すという意味を持つが、具体例として重要な情報、例えば「誰かに道、方向を」示すという用法もある。こうした意味でも Anzeige という用語選択は適切といえよう。また Anzeige には表示、指示などの訳もあり、かつて筆者は予告と訳したのだが、ここでは、それは示すだけで立ち消えとなる単なる指示ではなく、拘束力をもったものとして公けにし、解釈を拘束するという意味で使用されていることから、一応「告示」と訳し変えることとした。)

以上のような資料の概観とブーレンに拠る補足によって、「形式的告示」の輪郭は明らかになったと思われるが、最後に、この方法について比較的まとまった説明が行われている『宗教の現象学入門』第一部に即して、なぜ形式的なのかを中心に考察を行いたい。

### — 3 —

1920/21年冬学期の講義『宗教の現象学入門』は、二部から構成されており、そのうちの第二部「パウロに拠る具体的な宗教現象の現象学的解明」は、既に触れたようにカイロスの時間を明確にしたものとして以前から有名である。今問題とするのは、その第一部である。「方法的入門 哲学、事実的な生の経験と宗教現象学」と題された第一部は全部で四章からなっており、その第四章(11節から13節)が「形式化と形式的告示」という表題のもとに「形式化」「形式的告示」を取り扱っているのである。

講義の初めにハイデガーは哲学と科学は原理的に異なるという基本テーゼを

かけ、科学的認識と概念の理念を哲学に持ち込むことを戒める。

そこで哲学とは何かが問題になるが、哲学の自己理解は、科学的な証明、つまり「普遍的で客観的に形成された事象連関への分類によってではなく」(GA60/8) 哲学することによってのみ達成されるという。結局哲学は事実的な生の経験から由来するというのであり「哲学は事実的な生の経験の中で、この経験自身へと跳ね戻るのである。事実的な生の経験という概念が根本的なのである。」(GA60/8)

続いてハイデガーは、哲学の出発点としての「事実的な生」の比較的簡単なスケッチを行うが、その特色づけは、なぜ「形式的告示」なのかを理解する上でも重要と思われる。たしかに哲学は事実的生を出発点とするのだが、それはただちに哲学へとは至らないのであり、哲学は事実的な生の経験の中でのラディカルで本来的で困難な方向転換によってのみ到達できるのであるという。その困難さの理由は、すでに知られているように、他ならない事実的生の一定の傾向に求められるのである。

事実的な生の経験とは、「世界に対する人間の能動的、受動的態度の全体」(GA60/11) を意味しており、この世界とは客観ではなく、その中で人が生きる場所の環境世界であり、またそこには共同世界、自己世界が属している。この生の諸現象を類と種とに分類したりすることは「すでに原型を損ねることであり、認識論への墮落」(GA60/11) なのである。ハイデガーは、現象を内容意味、関連意味、遂行意味という三つの意味方向からなる意味全体性と規定しているが (GA60/63 および GA58/261, GA9/22 参照, また関係意味, 遂行意味の具体的分析については GA59/60f. および 74f. 参照のこと), ここではそうした世界に生きる日常的な事実的な生が、もっぱら内容 *Gehalt* に気を取られ、その中で現象が経験される根源的な如何に *Wie* を表す関連意味 *Bezugssinn* を見ないことが指摘され強調される。「事実的な生の経験は全く内容に専念しており、その如何にということ、せいぜいその中と一緒に一緒に行くだけである。」(GA60/12) この「事実的な生の経験は、経験の仕方に関して無関心 *Indifferenz* を示している。… (省略は筆者) この事実的経験は、いわば生のあらゆる用件

を担当するのである。違いや強調の変化は、全く内容そのものの中に存するのである。つまりこの無関心が事実的な生の自足性 Selbstgenügsamkeit を基礎づけるのである。」(GA60/12, 自足性については GA58/30「生の充実形式としての自足性」同書41「自足性の現象について」も参照のこと。)[我々はまず関連意味に注意を向けよう。そこで分かることは、この経験の経過は一貫して無関心という性格を帯びており、私が経験するものの区別は、その内容の中で生じていることである。…(省略は筆者) 経験されたものの多様は、経験された内容の中でだけ私の意識に達する。だから私がそこに居合わせていることや、世界によって連れ去られている仕方は、無関心のものである。](GA60/16) またこの内容はすべて「有意義性」という性格を担っており「経験の内容を規定しているこの有意義性という仕方では、私は私のあらゆる事実的な生の状況を経験するのである。」(GA60/13) (この時期の有意義性理解に関しては GA58/104f. GA63/93f. を参照のこと。)

この世界、有意義性へとらわれて自分の在り方には無関心の事実的な生(それをハイデガーは、「態度に応じた、落下して行く、関連的に-無関心な、自足的な有意義性の心労」(GA60/16)と形式的に告示するのだが)、それは講義の第二部のテーマとなるパウロの言葉で表せば、眠り酔う「夜の者、闇の者」(テサロニケ人への第一の手紙5-5, 7), 「この世のことに心配る」者(コリント人への第一の手紙7-33)なのであり、つまりは『存在と時間』でいう世界へと頹落する非本来的な実存である。事実的な生がこうした傾向を有する以上、「事実的な生の経験は、もしかしたら姿を現すかも知れないような哲学的傾向さえも、その無関心と自己充足性によって繰り返し覆い隠すのである。この自足的な心労の中で、事実的な生の経験は絶えず有意義性へと落ちて行く。」(GA60/15)そこでハイデガーははっきりと言う。「事実的な生の経験は、単に哲学することの出発点であるだけではなく、まさに哲学すること自身を本質的に妨げているものにちがいないのである。」(GA60/16)つまり事実的な生自身も「絶えず事実に経験された世界の有意義性連関の中へと傾斜する落下傾向」(GA60/17)が、とりわけ関連意味、実存の在り方に関心を示さないことによって、哲学の遂行、



本来的な方向転換、つまり自分自身がそうである事実的な生の根源的理解を妨げているというのである。この落下傾向の中では「ますます客観連関が形成し出され、それはますます安定する」(GA60/17) のであり「いわばその重量が、事実に生きられた生を構造的に客観規定し客観規制する傾向を条件づけて」(GA60/17f.) いるのである。事実的な生の経験は、初めから「自立した哲学の危険地帯」(GA60/9) なのである。

このような事実的な生の傾向に抗して、方向転換、哲学への動機を獲得するのは可能であるが困難であるとして、ハイデガーはここでは哲学の歴史を手がかりとする「楽な道」を選択するという。そこで次章ではトレルチュの宗教哲学の批判的考察がなされる。その中では宗教現象が客観的考察の対象になってしまうことが指摘され、続いて講義の表題の意味連関の核心をなす現象という「歴史的なもの」の検討に移るのである。ここでハイデガーは従来の歴史理論における歴史の意味が理論的構造的で派生的なものであると述べ、事実的な生の中で歴史的なものが持つ意味を明らかにしなければならないという。そしてその歴史的なものの普遍的な規定に関連して、第四章で「形式的告示」が論じられるのである。

ハイデガーはまず「形式的告示」とは「現象学的な解明にとって案内役となるようなある意味的方法的な使用」(GA60/55) であり、それは「現象学的方法そのものの「理論」」(同所) に属すること、またここで重要なのは、なぜこの形式的な告示が考察を導くにもかかわらず、予め把握された見解を問題の中に持ち込まないのかを理解することであると述べる。

そのうえでハイデガーは、時間的に生成し過ぎ去っているものという歴史の普遍的規定に触れ、そうした普遍性が哲学的に原理的なのかどうかは疑わしいと言う。その関連で、ハイデガーは何百年も前から哲学の客観の特徴と見なされてきた「普遍性」を取り上げ、数学では久しく以前から暗黙のうちに知られていたものの、フッサールが初めて明確に区別したという類の普遍化 *Generalisierung* と形式化 *Formalisierung* の相違をさらに考察することによって「形式的告示の意味の解明」(GA60/57) を試みようとするのである。(フッ

サールのこの区別についての同様の発言は GA58/217 を参照のこと。

類的普遍化とは、「赤」から「色」へ、「色」から「感覺的性質」へというように、種から類への段階的移行であり、それは事象内容的に規定され特定の事象領域に結びついている。それに対して、たとえば「この石は対象である」といった形式化は、事象内容には結びついていないし、あらゆる推移順序からも自由である。(フッサールの形式的存在論における「対象」「事態」「関係」などの対象的カテゴリーを想起せよ。) ハイデガーによれば、形式化においては、その規定は対象の内容から取り出して見られるのではなく、純粋な構えにおいて対象にその規定性がいわば「付着されて」見られるのである。それゆえ形式化は、事象内容一般に由来するのではなく、純粋な構えの関連の関連意味から発出するのである。つまり「形式的なものの根源は関連意味の内に存する」(GA60/59) のであり、形式化は関連意味にかかわるのである。では「形式的告示」における形式とは、この形式化、形式的存在論の意味での形式なのだろうか。ハイデガーは、形式化は、理論的構え的なものであり、また間接的ではあれ類的普遍化と同様一種の分類であるが、「形式的告示」は事象間の分類ではないこと(アリストテレスの「存在は類ではない。」参照)を指摘して、形式的告示は、理論的構え的態度の外部にある一層根源的なものであると主張する。

たしかに我々は、物の内容的分類である類的普遍化によってではなく、関連意味にかかわる形式化によって存在に関係するといえるが、その場合、同じように形式という言葉が使用されるとしても、「対象が常に客観であるような伝統的論理的な形式性と、その対-象が、まずは関係、つまり生を生として定義し分節化して即かつ対自的な生を得る志向的關係であるような現象学的形式性を区分すること」(RH180)が重要なのである。(この点に関しては GA58/106f. の「室内の「不可解な」物音(「何かがおかしい」、「何かの不気味だ」)この事象的経験の「何か」はその意味内容と意味機能によれば、対象性の形式論理的な「何か」とは少しも関係はない。…(省略は著者)形式論理的な何か一般の意味には、事象的に生き生きした個人的な生の関係の絶対的かつ最も徹底した阻止(「空虚」-形式)が含まれているのに対して、理論以前の何かは、生

のしかも生の不透明だが生き生きした予期の諸連関の極度に潜在的で内容のつまった不気味さを担っている。」も参照のこと。）

実際、形式化に基づく形式的存在論の形式的規定性は、「内容的には完全に無関心であるという理由によって、現象の関連と遂行の側面にとっては宿命的なのである。—なぜならそれは理論的な関連意味を予め指定したり少なくとも共に予め指定しているからである。この規定は遂行的なものを覆い隠して…（省略は著者）一方的に内容へ向かうのである。哲学の歴史を一瞥すれば分かることは、対象的なものの形式的規定性が哲学を完全に支配していることである。」(GA60/63)

こうした先決定、先入見を予防し、関連意味を関連意味として際立たせようとするための手だてこそが、形式的告示（キシールの表現では、「志向性」のより非客観化的な形式化）(RH177)なのである。形式的告示は「方法的契機として現象学的解明そのものに属している。なぜそれは「形式的」と言われるのか。形式的なものは、関連的なものなのである。この告示は、先だって現象の関連を告示すべきなのである。—無論、ネガティブな意味で、いわば警告的なのである。現象は、その関連意味が未決定に保たれるように先与されていなければならない。ひとはその関連意味が根源的に理論的なものであると想定しないように用心しなければならない。現象の関連と遂行は、前もって規定されないものであり、それは未決に保たれるのである。このことは、科学に最も極端に対立した態度なのである。ある事象領域への組み込みは存在せず、逆に：形式的告示は防御であり、先行する保全であり、それゆえ遂行の性格はなお自由で在り続けるのである。」(GA60/63f.) このようにこの講義では、形式的告示が現象の関連意味の遂行的解明（事實的生の動的解明）に関わるものであり、それを妨げる理論化的態度を防止するものであることが、明確に述べられている。またこうした予防措置の必要性は、遡れば結局内容意味へのとらわれ、つまり「事實的な生の経験の転落する傾向から生まれるのであり、この傾向は絶えず客観的なものへと滑落しそうなのであり、やはり我々はそこから現象を際立たせなければならない。」(GA60/64)なのである。

こうした形式的告示の説明のあと、ハイデガーは、形式的告示の方法を「歴史的なもの」に適用しようとする。しかし講義は次のような発言をもって中断されてしまうのである。「私が理解するような哲学は、困難のうちにある。…(省略は筆者)しかしそれでも私はこの苦境から自分を救いたいのであり、したがってこの非常に抽象的な考察を打ち切って、次回からは諸君に歴史を講義したい、しかも私は着手と方法の更なる考察は抜きにして特定の具体的現象を出発点にするだろう。もちろん私にとっては、諸君が考察全体を初めから終わりまで誤解するという前提のもとにである。」(GA60/65)

キシールの報告によれば、ハイデガーの最初の警告にもかかわらず非主専攻の学生たちがなお出席していた。難解な講義に途方にくれた彼らが、「宗教の哲学と称する講義なのに宗教的内容が欠けていると学部長に不平を言いに行った」(RH177)という知らせを受けたハイデガーは、十時間目の講義で突然そして怒って方法論的検討を中止し、それ以降は具体的な宗教現象の解釈に向ったという。形成途上にあった「形式的告示」の方法は以後体系的に考察されることはなくなるのだが、それでも「形式的告示」は20年代を通してハイデガーの「方法論的武器の「秘密の兵器」」(RH177)であり続けたことは、1929/30年冬学期の『形而上学の根本概念』(GA29-30/430等)での再登場や1928年のレーヴィット宛のハイデガーの書簡(「形式的告示、アプリオリや形式化等の通例の学説の批判、これらはすべて私にとってなおも現に在る、今では私はそれらについて語らないとはいえ。」(MHB37))でも知ることができるのである。

本稿は、「形式的告示」の基本的特色の素描を試みたにすぎない。それは内容意味への、あるいは現前へのとらわれを予防し、関係意味、遂行意味にスポットを当て実存のダイナミズムを言葉にもたらすための出発点となる方法であった。この「形式的告示」の方法の具体的な遂行過程を辿ること、この形式的告示という方法を意識しながら『存在と時間』を読み直すこと、フッサールの志向の意味概念との構造的類似関係の究明などが、この方法をさらに理解するために重要と思われるが、それらは今後の課題としたい。

## 注記

紙幅の関係で脚注等は割愛し、本文中に幾つかの参照事項などを埋め込んだ。読みづらくなつたかも知れない。ハイデガー全集は、例えば第60巻10頁は GA60/10 というように表記する。各巻の題名については、本文の2の冒頭を参照のこと。また、下記の五論文はそれらが収録されている Reading Heidegger From the Start edited by Theodore Kisiel and John van Buren State University of New York Press 1994 (=RH) のページ数で表記する。

Hans-Georg Gadamer, Martin Heidegger's One Path (全集版の原著は1987年刊)

István M. Fehér, Phenomenology, Hermeneutics, Lebensphilosophie

John van Buren, Martin Heidegger, Martin Luther

Theodore Kisiel, Heidegger (1920–21) on Becoming a Christian

George Kovacs, Philosophy as Primordial Science in Heidegger's Courses of 1919

その他の引用文献は以下のように略記する。

P1=Otto Pöggeler, Der Denkweg Martin Heideggers 2. Auflage 1983

P2=Otto Pöggeler, Heideggers logische Untersuchungen, in Martin Heidegger: Innen- und Außenansichten Hrsg.v. Forum für Philosophie Bad Homburg 1989

VB=John van Buren, The Young Heidegger Rumor of the Hidden King 1994

L=Karl Löwith, Heidegger Denker in dürftiger Zeit 3. Auflage 1965

MHB=Martin Heidegger, Drei Briefe Martin Heideggers an Karl Löwith in Zur philosophischen Aktualität Heideggers II 1990